

◆京菓子デザイン部門/18作品

お名前	フリガナ	作品名(銘)	参考にした段	展示会場(予定)
泉元 遊子	イズミモト スミコ	暮い月	第32段「九月廿日の比、ある人に誘はれたてまつりて〜」	有斐斎弘道館
井戸 伸	イデ レイ	ほころび	第137段「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものは〜」	有斐斎弘道館
伊東 彩	イトウ アヤ	おしくくみ(押包み)	第52段「仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ〜」	旧三井家下鴨別邸
大橋 里恵	オオハシ リエ	結ぶ	明珠在掌	有斐斎弘道館
長田 蒼生	オサダ アオイ	月夜	第21段「万のことは、月見るにこそ、慰むものなれ」	有斐斎弘道館
海崎 美香	カイザキ ミカ	飛鳥川	第25段「飛鳥川の瀬瀬、常ならぬ世にしあれば〜」	有斐斎弘道館
岸本 千恵美	キシモト チエミ	雙ヶ岡	序段、第19段「折節の移り変るこそ、ものごとにあはれなれ」、 第155段「世に徒はん人は、先づ、機嫌を知るべし」、 双ヶ丘の丘陵	旧三井家下鴨別邸
黒川 芽実	クロカワ メミ	真如の月	第137段「惟樂・白隠などの、濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身に沁みて、心あらん友もがなと、都恋しう覺ゆれ」	有斐斎弘道館
幸田 久仁子	コウダ クニコ	なりひさこ	第18段「人は、己れをつまやかにし、奢りを退けて、財を持たず〜」、許由と孫晨	旧三井家下鴨別邸
齋藤 希美	サイトウ ノゾミ	土のいろ	第30段「人の亡き跡ばかり、悲しきはなし〜」	有斐斎弘道館
田鶴 寿弥子	タヅル スヤコ	真縁(しんえん)	第82段「不具なるこそよけれ」、第139段「家にありたき木は」、 日本古来のマツへの思いより	旧三井家下鴨別邸
谷口 敦子	タニグチ アツコ	余花祭(よかさい)	第138段「『祭過ぎぬれば、後の葵不用なり』とて〜」	有斐斎弘道館
堤 恵	ツツミ メグミ	しろうり	第60段「真乘院に、盛観僧とて、やんごとなき智者ありけり〜」	有斐斎弘道館
鄭 愛心	テイ ブンシン	染	第38段「名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚かなれ〜」	旧三井家下鴨別邸
富久 菜月	トミヒサ ナツキ	雨と桜	第19段「折節の移り変るこそ、ものごとにあはれなれ〜」	旧三井家下鴨別邸
濱崎 亜紀津	ハマサキ アキツ	雨に月を恋ふ	第137段「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものは〜」	旧三井家下鴨別邸
濱崎 須雅子	ハマサキ スガコ	徒然なるままに	序段、第93段「されば、人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、 日々に楽しまざらんや〜」、第241段「〜心身永く閑かなり」	旧三井家下鴨別邸
山中 秀書	ヤマナカ ヒデフミ	さもあらんかし	第8段「世の人の心惑はす事、色欲には如かず。人の心は愚かなるものかな〜」、久米の仙人の件	旧三井家下鴨別邸

◆茶席菓子実作部門/35作品

お名前	フリガナ	作品名(銘)	参考にした段	展示会場(予定)
石田 ゆき	イシダ ユキ	月露に親しむ候	第137段「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものは〜」、始めと終わりの美学	有斐斎弘道館
一方 隅 苧	イツボウズミ サエ	雨夜(あまよ)の月	第137段「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものは〜」	有斐斎弘道館
植村 健士	ウエムラ ケンジ	柑子かこひ	第11段「神無月の比、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍りに〜」	旧三井家下鴨別邸
植村 健士	ウエムラ ケンジ	先達	第52段「仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ〜」	有斐斎弘道館
岡田 理歩	オカダ リホ	霧薫る	第32段「九月廿日の比、ある人に誘はれたてまつりて〜」	旧三井家下鴨別邸
片岡 聖子	カタオカ セイコ	時雨月夜	第137段「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものは〜」、始めと終わりの美学	有斐斎弘道館
河野 浩子	カワノ ヒロコ	不完全の美	第137段「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものは〜」	有斐斎弘道館
幾世橋 陽子	キヨハン ヨウコ	雲上の快	第124段「是法法師は、浄土宗に恥ぢずといへども、学匠を立てず〜」 平常心というが理想的な心の有り様。この境地にいたるまでの様々なことに感謝する心。	旧三井家下鴨別邸
高地 望	コウチ ノゾミ	不知夜月	第241段「望月の円かなる事は、暫くも住せず、やがて欠けぬ〜」	有斐斎弘道館
斉藤 美穂	サイトウ ミホ	晩秋の香(ばんしゅう)の	第32段「九月廿日の比、ある人に誘はれたてまつりて〜」	有斐斎弘道館
笹井 真実	ササイ マミ	しゅわしゅわ	序段「つれづれなるまゝに、日くらし、硯にむかひて、心に移りゆくよしなし事を〜」	有斐斎弘道館
佐藤 由紀子	サトウ ユキコ	閑居	海北友雪筆「徒然草繪巻」、第55段「家の作りやうは、夏をむねとすべし〜」、序段「つれづれなるまゝに、日くらし、硯にむかひて、心に移りゆくよしなし事を〜」	有斐斎弘道館
塩貝 祥代	シオガイ サチヨ	徒然	序段「つれづれなるまゝに、日くらし、硯にむかひて、心に移りゆくよしなし事を〜」	有斐斎弘道館
杉田 麻貴	スギタ マキ	暗中に在るもの	第89段「『奥山に、猫またといふものありて、人を食ふる』と人の言ひけるに〜」、宗教人の堕落や滑稽さを笑劇的に記した段。	旧三井家下鴨別邸
杉田 麻貴	スギタ マキ	夜の火影	第191段「『夜に入りて、物の映えなし』といふ人、いと口をし〜」、夜の闇と光、そこに照らされるもの美しさ。	有斐斎弘道館
杉中 聡	スギナカ サトシ	光輝の一矢	第92段「或人、弓射る事を習ふに、諸矢をたばさみて的に向ふ〜」	有斐斎弘道館
鈴木 幸代	スズキ サチヨ	心月(しんげつ)	第32段「九月廿日の比、ある人に誘はれたてまつりて〜」、おもてなしの心	有斐斎弘道館
園山 武志	ソノヤマ タクシ	神いけず	第236段「丹波に出雲と云ふ所あり〜」	旧三井家下鴨別邸
高田 真衣	タカダ マイ	大つごもり	第19段「追離より四方祥に続くこそ面白けれ」	有斐斎弘道館
田中 正徳	タナカ マサノリ	すさびみゆ	唐木順三『中世の文学』(1965年新版、筑摩書房)、堀田善衛『定家明月記抄』(1993年合本、新潮社)、山口富蔵『微妙に感じる』『ひとつとなるもてなし』(2021年放映、NHK総合「京コトはじめ」)	有斐斎弘道館
谷川 イリーナ	タニガワ イリーナ	撞着(どうちゃく)	徒然草では、二つの相反する事柄を対比させながら描写している技法を良く使われており、読み手を魅了する。	旧三井家下鴨別邸
寺田 庄吾	テラダ ショウゴ	唐瓶子(からへいじ)	第103段「大覚寺殿にて、近習の人ども、なぞなぞを作りて解かれける趣〜」	有斐斎弘道館
寺田 庄吾	テラダ ショウゴ	空の鏡	第212段「秋の月は、限りなくめでたきものなり〜」	旧三井家下鴨別邸
永田 貴子	ナガタ タカコ	世捨て人	第20段「某とかやいひし世捨人の〜」	有斐斎弘道館
中丸 剛志	ナカマル タカシ	人の天	第122段「次に、食は、人の天なり。よく味はひを調へ知れる人、大きな徳とすべし」	有斐斎弘道館
西川 佳菜	ニシカワ カナ	冬の日	第31段「雪のおもしろう降りたりし朝、人のりが言ふべき事ありて〜」	有斐斎弘道館
にっちも	ニッチモ	桃尻は荒馬乗るべからず	第145段「御隨身秦重初、北面の下野入道信願を〜」、桃尻は馬の鞍にあわない。その人が荒馬に乗ったから落馬の相が出ている...のところが。	有斐斎弘道館
久永 弘昭	ヒサナガ ヒロアキ	花散らし	第19段「折節の移り変るこそ、ものごとにあはれなれ〜」	旧三井家下鴨別邸
福島 由美子	フクシマ ユミコ	有明月(ありあけづき)	第32段「九月廿日の比、ある人に誘はれたてまつりて〜」	有斐斎弘道館
藤本 宏美	フジモト ヒロミ	一路(いちろ)	第188段「或者、子を法師になして〜」、第41段「五月五日、賀茂の腕へ馬を見侍りに〜」、第49段「老い來りて、始めて道を行ざんと待つことなかれ〜」、第93段「牛を売る者あり〜」、第155段「世に徒はん人は、先づ、機嫌を知るべし〜」	旧三井家下鴨別邸
藤本 まどか	フジモト マドカ	始む(はじめ)	第137段「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものは〜」	有斐斎弘道館
堀内 鉄也	ホリウチ テツヤ	家居の光	第55段「家の作りやうは、夏をむねとすべし〜」	有斐斎弘道館
増田 雅也	マズダ マサヤ	自分軸	第235段「主ある家には、すいろなる人、心のまゝに入り来る事なし〜」	有斐斎弘道館
森 みどり	モリ ミドリ	徒然	第75段「つれづれわぶる人は、いかなる心ならん〜」	有斐斎弘道館
劉 純寧	リュウ チュンニン	いみじけれ	第82段「『羅の表紙は、疾く損ずるがむびしき』と人の言ひしに〜」	有斐斎弘道館